

在宅医療システムで特許



在宅医療を支援する機器で特許を取得したまつなみリサーチパークの研究者ら＝25日午後、羽島郡笠松町田代、松波総合病院

脈拍など情報送信

羽島郡笠松町田代の松波総合病院は25日、付属の研究所「まつなみリサーチパーク」が考案した、身に付けて使うウェアラブル機器を利用した「在宅医療支援システム」が特許を得たと発表した。機器を装着した高齢者の脈拍や心電図などの身体情報を、かかりつけ医や病院に常時送信できる仕組み。異変も察知できる。在宅医療の利便性向上が期待できるといい、実用化に向けて複数の企業と開発を進める。

(山田俊介)

松波総合病院 装着型機器利用、患者見守る

慢性期病床を削減し在宅医療への転換を図る国の方針に沿い、自宅でも病床と同様の機能を備えられるようにしようと今年1月から開発を開始し、腕時計型の試作機を企業と製作。主治医が24時間、患者の情報を把握できるシステムとして8月に特許を取得した。

機器には緊急ボタンを付け、患者が体の変調を感じた時にはすぐに知らせることができるといふ。意識を失った場合も、受け取ったデータから主治医が異変を察知で

きる仕組みだ。実際の運用時には消防や警備会社などとの連携を想定している。肌に触れる機器は、耳への装着や湿布型など、さまざまな形状を模索。早期の実用化に向けて開発を進める。

同病院の松波英寿理事長

は「24時間、常に誰かが見てくれているという安心感があり、孤独死もなくなる。地元での実用化につなげたい」と話した。